

神戸市就学・教育支援委員会 第1回視覚障害教育部会

1 開催日時 令和5年10月30日(月)15時~17時

2 開催場所 神戸市総合教育センター601号室

3 出席委員 高田部会長 鈴木部会員 中西部会員 山本部会員
オブザーバー 川畑課長 古本校長 山田校長

4 議事

(1) 視覚障害教育を取り巻く現状について

・医療の進歩で低出生体重児の命が助かるようになり、障害のある方は増えているように思うが、以前多かった未熟児網膜症は、ある程度の体重以上の場合、うまく管理されているようにも思う。

・市立盲学校だけでなく、県立、国立の近隣にある盲学校の児童生徒数も大きく減少している。

・市立盲学校に在籍する児童生徒は、視覚の単一障害が多いが、療育手帳を保持している児童生徒や、病弱と重複障害のある児童生徒もいる。

(2) 視覚障害教育課題の整理について

・子供の数が少なくなると、同じ年代の子供と交流することができない。子供は、同世代の子供と触れ合いながら、学び発達していくが、その機会を持ってないことが問題。

・盲学校は、専門的な教育ができるが、地域校の特別支援学級でうまく供給できるのか懸念される。また、盲学校がなくなると、教員の教育スキルが低下することも危惧される。

・同じ障害種別で一定の集団で学び合う環境は、将来像を描くことができ、また、つながりを持ちやすい。児童生徒や保護者が、同じ悩みや思いを共有、共感する場の確保も必要。

・市立盲学校には幼稚部・小学部・中学部・高等部と幅広い年代の保護者がいるため、様々な話ができる。盲学校は、保護者にとっても必要な場所だと思う。

・教育は「教える」と「育む」部分があり、年齢が低くなるほど、育むことが非常に重要。

・福祉と教育は、横のつながりで連携し、関わり合える仕組みが必要。

・保護者同士のお互いのアドバイスや話は、とても受け入れやすく、役に立つ。ソフトな環境で、人間関係の関わりが必要だと思う。

・神戸市独自の事業に、障害者の相談支援事業がある。各機関が連携していく仕組みが大切。

・教員は、点字指導など専門性が欠かせない。短い時間で習得するのは難しい。

・ひとみ教室に通う児童生徒が、市立盲学校へ学びの場を変更することもあり、ひとみ教室が併設されているのは、教員にとっても、児童生徒にとっても効果的。

・隣接する湊小学校との交流について、来年度教科によっては年間を通して交流学习を進める予定。中学部以上は、地域の中学校と一緒に学ぶことは難しいため、肢体不自由部門のある友生支援学校との交流学习を検討しているところ。

・地域校の交流学习では、障害の有無に関わらず、同じ学年の友達という様子で学習してい

る。非常に有意義であり、それは視覚障害のある児童生徒も同じだと思う。

- ・教員の専門性などの課題を解消できれば、地域校で一緒に活動する意義は大きい。
- ・拡大教科書の申請数の減少は、ICTが拡大教科書にかわっているのだと思う。

(3) 令和の学校教育における「適切な学びの場」について

- ・学びの場の選択について、特別支援学校間での選択にするのか、地域校の特別支援学級と特別支援学校の選択にするのか。できる限り様々な選択ができるのがよいと思う。
- ・医療では治療に関することとどまり、発達や教育の環境までに対応できない。
- ・ニーズにあわせて総合的なアドバイスを受けられると、思いが伝わりやすいと思う。
- ・京都にある放課後等デイサービスでは、幼稚部の子供は、放課後に遊びや、基本的な学習を受けている。日中は特別支援学校で、放課後はデイサービスで過ごし、仕事終わりに保護者が迎えに行くという、非常に良い流れができています。
- ・地域での学びの場は、子ども自身が刺激を受けることや、社会性の醸成という点において有効であると考えます。一方で、環境整備や、視覚障害の子を持つ親同士のつながり等の課題もある。特に、親同士のつながりは、行政が連絡会や情報交換会等を企画することで、カバーしていく必要があると考えます。
- ・出産時に病院で診断を受けた親は不安な気持ちを持っているため、行政と眼科とが連携を図り、病院から直接支援の案内ができるようになることが望ましい。
- ・子供だけに焦点をあてるとうまくいかないため、家族を含んだ視点で、家族単位で色々なところで支えて、育むことが大切だと思う。